2019年6月19日　第7号

全労連青年部ニュース
YOUTH TOPIC
つながる・たたかう・支えあう青年部を

ホームページhttp://www.zenroren.gr.jp/jp/seinen/　ブログhttp://blogs.yahoo.co.jp/zenrourenpower

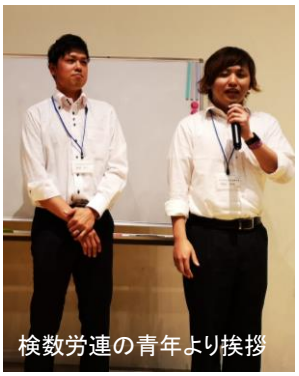
ユニオンユースアカデミー2019

全労連青年部は6月1～2日に「ユニオンユースアカデミー2019 ～個人の尊厳を大切に 人権について考えるフィールドワーク～」を岡山県で開催しました。6単産、18地方組織から43人が参加しました。

１日目はハンセン病療養所「邑久光明園」を見学。ハンセン病患者の人間回復裁判を支援する地元のガイドの難波幸矢さん案内のもと、らい予防法によって国主導でハンセン病患者たちが差別を受け隔離収容されてきた歴史や、療養所の中でいかに非人道的で自由のない生活を送っていたかを知ることができました。また、入所者さんから貴重なお話が語られ、当時の患者さんたちの生活の様子、そして国を訴えるに至った思いを肌身で感じることができました。フィールドワーク終了後は、岡山県災対連事務局長・伊原潔さんを講師に「豪雨災害と人権問題」をテーマにした学習会をおこないました。倉敷市での支援活動の中で、被災現場で起こる問題について学びました。

２日目は「人権とは何か～朝日訴訟から考える～」というテーマで学習会をおこない、愛媛大学法文学部教授・鈴木靜さんの講演を聞きました。「人権を守るためには行動すること」をキーワードに朝日訴訟の運動の歴史から、「たたかったからこそ権利をかちとった」と語りました。講演のあとは８グループに分かれて分散会をおこない、身近なところで人権侵害は起きていないか、自分の中に差別意識はないかなど、青年同士で自身の受け止めや想いを交流しました。人権とは何か、個人の尊厳が尊重される社会とは何かを考え、深めあった２日間となりました。

盛り上がり、笑いの絶えなかったレク企画！


検数労連の青年より挨拶

青年らしく！交流会も大盛り上がり♪

たっぷり学習をしたあと、１日目の交流会では、体を動かすレクで笑いの絶えない時間に♪地元岡山の検数労連（ユニアカ初参加！）の青年から「全国の皆さんと学び、交流できてよかった。また参加したい」と感想をもらいました。

◆「邑久光明園」フィールドワーク

話に聞き入る参加者たち

きつい傾斜のトロッコ線

１日目の午後はバスで長島大橋を渡り邑久光明園のフィールドワークへ行きました。物資搬入のため子どもたちも働かされていたきつい傾斜の「トロッコ線」、ハンセン病患者の遺骨の残骨や差別政策によりこの世に生を受けられなかった胎児の遺骨が納められている「しのびづか公園」、入所者のための祈りの場である「光明園家族教会」などを見学しました。入所者さんからの聞き取りでは、「自分たちは迷惑をかける存在だと思っていたが、人間として声を上げた。若い人たちに話を聞いてもらえてよかった」と語ってくださいました。参加者からは「治療のためではなく、人間らしく生きることをまったくもって無視されていた“根絶”のための隔離の実態が衝撃的だった」「現在でも偏見や差別に苦しんでいる人たちがいるということを、自分たちが知ろうとしなければ知らない、その事実がおそろしいと思った」「入所者さんの話を聞いて、声を上げ国を訴えたという歴史が興味深かった」「ガイドさんのこれまでの活動の思いや願い、生き方に刺激を受けた」などの感想が寄せられました。

療養所内の家族教会

◆学習会「豪雨災害と人権問題」

１日目夕方には真備豪雨災害の実態と災対連の活動教訓を学びました。講師の伊原さんは「被災の現場では人権意識が欠如する」と語り、市役所に届けられた支援物資の受け取り数の制限や、帰り際の持ち物検査の実態、仮設住宅でカレンダーを画鋲で貼り付けることが禁止されていたことなどを話し、「荷物検査はプライバシーの侵害だ。カレンダーの貼り付けなど日常的に誰でもおこなっていることを禁止するというのは普段通りの生活の妨げだ」と指摘しました。「些細なことかもしれないが、人権侵害として抗議し、撤回させてきた。普段意識することはないだろうが、人権は日常生活の中にある」と訴えました。「被災者は体力的にも精神的にも苦労しているのに、差別されるのが許せない」「国の被災者支援の姿勢に疑問を持った」などの感想があげられました。

災害現場で起こる人権問題を学ぶ

◆学習会「人権とは何か～朝日訴訟から考える～」

人権とは何かを考える

２日目の学習会で講師の鈴木先生は「世の中の“おかしい”と感じることはひとりでは解決できない」と話し、その裏にある制度政策や社会構造、歴史的背景を学び、仲間を組織して問題解決にあたる必要があると語りました。朝日訴訟の記録映画を鑑賞し、「生存権に基づく“人間らしく生きる”ための社会保障を」と声を上げたたかった朝日茂さんは社会の認識を大きく変え、ハンセン病違憲国賠訴訟への影響も与えたと話しました。「人権とは、その人がその人であること。自己決定し、選択できるということ。目の前の人に尊敬の念を持ち対話することが大切」と述べ、「人権は、国がやさしく気付いて守ってくれるものではない。一人ひとりが心がければよいというものでもない。侵害された人たちが声を上げ、たたかい、かちとってきたものである。制度として国家に保障させるものだ」と訴えました。参加者からは「学んでいるだけでは人権は得られない。行動することが大切だと思った」「朝日訴訟の問題は現在にもつながるものだと思った。社会保障や世の中のあらゆる基準の底上げが必要だと思った」「生活保護受給者が要望を言うと叩かれる現場を目撃する。賃金の低さや多忙による余裕のなさが原因だと思う。もっと現場に目を向けてほしい」「人権というものに改めて気づきがあり、それを仲間と共有できた。“組合はなんでもできる”と感じた」などの感想があげられました。

身近な問題から人権意識について話し合う

２日間を通して「人権について、３つの視点から深く学べた。より多くの人に伝え、自分の活動の在り方について考えたい」「人権というテーマで新たな問題意識を持てた。社会的にも組合活動をする上でも避けて通れないもの。今回のことを学び生かして活動していきたい」などの感想が寄せられました。